古城

第　36　号
＝発行者＝
茨城県立江戸崎総合高等学校
同窓会広報委員会
TEL 029-892-2103
＝印刷所＝
倉沢印刷株式会社

ごあいさつ

同窓会長
山岡恒夫
（昭和43年度卒）

会員の皆様には、益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。日頃からの、会員の皆様方の同窓会に対しましてのご協力に心から感謝致しております。

今年度も、母校の生徒達が頑張りました。特に弓道部、馬術部が活躍しました。

進学においても、平成十九年度より毎年国公立大学に進学者を出しており、今年度も茨城大学に合格しました。

三年前より同窓会給付型奨学金を毎年贈ることができることは、喜ばしいことです。

母校を取り巻く地域の環境が大きく変わろうとしております。圏央道の整備も進み、今春には利根川を渡ります。来年度には東関東自動車道に繋がります。更に二十七年度には東北自動車道から関越、中央、東名高速道までも繋がります。また、周辺地域の大型開発も進んでおります。

江戸崎総合高校は今年十周年を迎えます。十一月十四日に、盲目の歌手、田中玲子さんの記念講演を行います。

私は卒業直前に、江戸崎高校の体育館で「泥かぶら」という劇を見ました。泥んこのかぶらのような醜い顔ゆえに、村の悪童たちから「泥かぶら」とはやされ、いじめられていた一人の少女が「仏のように美しい子」へ変わっていったというお話です。何がこの女の子を美しくしたかといえば、旅のおじいさんが教えた三つのことを、来る日も来る日も自分と闘って実行したからでした。

その三つとは、

・いつも、にっこり笑うこと
・ひとの身になって思うこと
・自分の顔を恥じないこと

私は今でも時々、この三つのことに努めなければと思い出しています。

田中さんの記念講演を聞いて、生徒の皆さんには、困難な時代に負けないたくましさと、人を思う優しい心を身につけて巣立ち、社会で活躍していただきたいと思います。

会員各位の、今後益々のご活躍と、母校の発展・飛躍を祈念いたしましてご挨拶といたします。

稲敷市長へ活躍の報告をする馬術部・弓道部

大学進学を考えている皆さんへ！

江戸崎総合高等学校 同窓会給付型奨学金が 増額されました!!

・主　旨
稲敷市内唯一の高校として、今後の地域社会を担うべき人材を育成することを目的として、奨学金を支給する。

・給付資格
本校に１年以上在学し、学業・人物ともに優秀かつ品行方正であって国公立大学に合格し、入学予定の者。

・給 付 額　200，000円

地域に支えられて

学校長
根崎稔美
（昭和46年度卒）

一昨年四月に母校に校長として赴任して、早二年になります。四十年ぶりに母校に戻り、可愛い後輩たちに囲まれながら、あと少しで退職を迎えるところまで来ました。この間、同窓会会員の皆様方には、後輩たちのために物心両面からのご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

この二年間は、特に特色ある学校づくり推進事業として「シェイクハンドいなしき（地域との連携）」という事業を立ち上げてまいりました。地元稲敷市を中心に近隣の市町村のご協力を得ながら、地域の小中学生との様々な交流や地域への奉仕活動、福祉系列の介護施設での実習やボランティア活動への積極的な参加等を通して地域との連携を図ってまいりました。これらの事業がスムーズに実施された背景には、市長様をはじめ市の幹部職の同窓生のサポートがあったからに他なりません。

今後とも生徒たちが、この地域の方々のお世話になりつつ、この稲敷の地をキャンバスにして幅広い活動を展開していければと思います。そして生徒達がそこでの諸活動を通して地域の一員であることを自覚し、将来のこの地域を支える有為な人材となることを期待するものであります。

来年度は、創立十周年を迎えます。今後とも、会員の皆様方には本校が地域連携の高等学校として更に発展し続けていけますよう、ご支援・ご協力をお願いいたします。

授業参観を通して思うこと

副会長
大鳥居良行
（昭和34年度卒）

江戸崎総合高等学校はもうすぐ十周年を迎える。私は同窓会の一員としてその歩みを頼もしく見つめてきた。

手元にある平成二十一年度の学校案内には、総合高校になって初めて巣立った、希望に輝く卒業生のメッセージが紹介されている。そこには五つの系列を歩む一人一人の思いが綴られていた。入学時の希望がそのまま実現した者、途中で進路変更した者とそれぞれの三年間の歩みが紹介されている。そして、彼らの綴るそれは自分らしい進路選択が出来た喜びと自信と学校への感謝の言葉があった。正に青春の一ページである。

ところで先日は道徳の公開授業を見る機会を得た。そこでは十年の歩みがスポーツや進学の成果に加え、一人一人の生徒に落ち着きと力強さを育てているように感じた。

だが、今は世界各地の紛争やiPS細胞の発明等、新たな生き方が求められている。同窓会の絆の中で未来を話し合えればとも思った。

母から故郷へ

事務局長
松本博志
江戸崎西高等学校
（昭和53年度卒）

今秋、母校である江戸崎西高の校舎解体が始まった。平成十九年三月に閉校してから、六年半の歳月を数えた。この間に、幾度母校の前を通っただろうか。主を失った彼女は、まるで魂が抜けたようには見えた。日に日にすすけ汚れていく様は、私の心をも萎らせた。「早く取り壊してくればいいのに。」そう思う日々だった。そしてこの秋、彼女の容態が急変した。

「あれ？始まったんだ。」偶然通りかかったその日に、解体工事を始めたらしかった。あれほど望んでいたのに、いざ始まってみると、残念な気がする。我が事ながら、人の気持ちとは、なんと勝手なものなんだろうかと思う。

この解体が終われば、私の経歴にある学舎は、全て無くなる。小中学校は建て替えだから、こんな気持ちにはならなかったのだが。何て言うのかな…、ノスタルジーというやつかな。多分そこには、心のカケラが残っているんだろうね。西高に関わった、全ての人たちの心のカケラが。人は、そういう処を「ふるさと」と呼ぶんだね。

「一望千里常陸野の我らが母校江戸崎西高は、間もなく我らのふるさとに生まれ変わります」と、初老を迎えた昔の青年が申しております。

取り壊し作業中の旧江戸崎西高等学校③

取り壊し作業中の旧江戸崎西高等学校②

在校当時の思い出

十余島支部長
松本幸衛
（昭和41年度卒）

私が入学した頃の母校は、団塊世代に当たるため、生徒数や学科数共に県内でも最上位の大規模校でした。それ故に大変活気がありました。

三カ年の在学中に一番の思い出としては、部活動で山登りが出来たことです。

山好きで数学担当の藤原先生、体育担当で茨城大学山岳部OBの奥村先生に出会えたことは大変ラッキーでした。

秩父・雲取山への縦走を契機に創部しました。

講堂脇の一見山小屋風の建物を部室にし、学科・学年を超えて山好きが集まって、大変楽しい想い出づくりをさせてもらいました。

夏休み、夜行列車に乗って、槍～穂高、日馬～鹿島槍、尾瀬等に行きました。

田んぼや畑地の中での日々の生活しか知らない私にとって、大汗と冷や汗を共にかいて登り詰めた山頂での爽快感、友達との交流は格別でした。今でも鮮明に想い出せます。これは在学中の私の一番の財産です。

高校時代の思い出と近況

大須賀支部長
山口勝夫
（昭和35年度卒）

私が江戸崎高校へ入学した昭和三十三年は、四つの学科があり一学年三百人を超える大所帯でした。

入学してからの私の思い出は、入学と同時に野球部に入り、ひたすら白球を追い続けた、がむしゃらな三年間だったことです。

もう一つ強く印象に残っているのは、秋の体育祭です。全校生徒九百人超が三つの団に分かれて、計画から運営、応援に至るまで、それぞれのカラーを出し合い、まさに年に一度の大きな催しでした。嗚呼、これが青春、若さだと今でも思い出されます。

さて、私の近況ですが、私は高校卒業と同時に農業に従事しました。当時の農業は働くのが年に二ヶ月ほどで、収入は年に一度でした。これではダメだ。年間を通して働くことが出来て、安定した収入を得られるような農業にしていかなければと考えながら働いて参りました。

現在は息子二人が就農してくれて、田畑合わせて五十ヘクタールの耕作をしております。私自身、二年前にほとんどの役職等を辞め、農業に戻り、息子達に雇ってもらいながら頑張っております。

集まり散じて、人は変われど…

柳町　政広
（昭和46年度卒）

私の好きな一節に「集まり散じて、人は変われど」があります。歴代校長先生をはじめ、教職員の皆様のご指導のもと、多くの生徒が江戸崎高等学校に集い、散じて大人となり、各方面で活躍されてることは誠に嬉しい限りです。

私達が通った学舎は、木造から鉄筋コンクリートへ変わりはしましたが、じっと見つめてきたバックネット裏の「ヒマラヤ杉」は、世代を超えても、私達と触れあっていました。

今年一月、還暦を迎えた四十六度農業科卒業生は、江戸崎某所に臨時登校し、当時の先生方にも臨時出勤していただきました。四十有余年ぶりの再会は、恩師と酒を酌み交わす車座があちらこちらで見られ、時間の過ぎるのを忘れたくらいでした。懐かしい友と歌い・語り合う中に、現在の自分の真の姿を見つめる機会を得ることが出来ました。穏やかな自然風土に恵まれた稲敷で暮らしていても、生活の多様化で昔ながらの、良き時代の農村が持ち続けた連帯感や人と人の繋がりや、地域に対する関心が失われつつあるように思えてなりません。日々の忙しさの中で、真剣に心の底から語り合い、じっくり物事を考えたりする余裕もなく、ただ職場と家庭の往復だけに終わる日々に嫌気を感じた昨今、四十三年降りの再会は、私達に良きビタミン剤の活力をいただきました。

近年「昭和」を題材にした、レトロ商品がブームのようですが、携帯電話もパソコンも無かったけれど、誰もが夢を持って心豊かに暮らしていた、あの当時の「昭和」に戻りたい。しかし戻れないもどかしさを胸に刻み、友との再会を誓い合い、某所を後にした次第です。

縁

伊藤　均
（昭和47年度卒）

私が江戸崎高校を卒業したのは昭和四十八年の春。普通科の最終卒業生です。

当時は永久校舎新築の最中で、木造校舎の取り壊し工事が行われていた影響で、一年のうち三回も教室の引っ越しをした記憶があります。

旧校舎が無くなり新校舎が基礎工事から徐々に完成に向かっていく姿を毎日目にしながら学校生活を送っていました。しかし、私達は校舎の完成前に卒業式を迎え、新校舎には入れませんでした。

三年間の充実した高校生活の中でこのことだけが心残りでした。その後、次女が江戸崎総合高校の一期生で入学し、私がＰＴＡ役員をつとめることになりました。完成間近で卒業してしまった校舎で三十数年ぶりにＰＴＡの仕事が出来たことは、目に見えない不思議な縁を感じます。

総合高校は間もなく創立十周年を迎えます。統合してこれまで後輩達は国公立大学への入学や、弓道部、馬術部、パワーリフティングなどの運動で素晴らしい活躍をしてくれています。今後も頼もしい後輩達の活躍と母校の発展を心からお祈りしています。

江戸崎高校の思い出

諸岡周示
（昭和48年度卒）

高校を卒業した当時は、何故か毎週のように休日は学校を見学していたことが思い出されます。私は在学中、生徒会の副会長をしていましたから、生徒集会などを開催して、服装規則問題など活発にやっていたのを思い出します。

あの当時はまだ帽子を被ることや靴は黒色と決まっていましたが、帽子を被ることは自由にしたり、修学旅行のときは絶対に茶色の靴を履かないなど、全員が守ってくれたことが印象に残っています。

卒業近くになると、学校に居たくて居たくてたまらない気持ちがありました。

あれから四十年が過ぎ定年を迎えようとしていますが、時々思い出しては懐かしく、そして励まされている今日この頃です。現在は、江戸崎高校から江戸崎総合高校に変わりましたが、生徒の皆さんが一生懸命やっていることを、とても喜ましく思っています。現在、私はサラリーマンをしながら、地元では消防団活動をしています。江戸崎高校卒業の先輩・後輩がたくさんいます。いろんな人が活躍をしているので、これもまた励みになっています。最後になりますが、生徒諸君も含め皆様の今後のご活躍を祈ります。

満州援農実習から七十年

湯原　實
（昭和19年度卒）

私達が満州援農実習に行ったのは今から七十年前の昭和十八年、江戸崎農学校二年生の春でした。随分昔のことになります。最も印象に残っているのは「満州の広さ」でしょうか。地平線の彼方まで続く広大な原野の風景が今でも心に残っています。それは引率された富田先生も書かれていますが、日本とは全然違う風景でした。

戦時中のことですので使命感に燃え、毎日の仕事に熱中しました。よくあれだけ働けたものだと思います。この文面だけでは書ききれない思い出でいっぱいですが、実習中に北安警察署（現在の黒竜江省北安市）の警察官が面会に来られたことがありました。この警察官は私の生家近く、鉾村出身の方でした。故郷のことを懐かしがっていろいろ聞かれました。いま考えますと私達が実習に来たこと、そして名簿が警察に届いていたものと思います。

もう一つ、富田先生が茨城県の開拓団を訪問したときのことです。団に着くと突然後ろから「富田先生」と声をかけられたそうです。声をかけた方は、富田先生の谷田部農学校時代の教え子だったとのことでした。「この広い満州で…」と富田先生が興奮気味に話されていたことを思い出

します。先生もお亡くなりになりました。ご葬儀の際、授業に行った生徒達で参列しました。『太平洋戦争下・農学校生の日記』のページをめくりながら昔のことを思い出しています。

上段右端が湯原実氏

重機を使っての実習風景

『太平洋戦争下・農学校生の日記』について

旧職員
松岡　斉

太平洋戦争が終わって今年で六十八年になります。あの戦争を体験した人たちも少なくなりました。

今回、戦時中に江戸崎農学校生が綴った「生活日誌」「北海道援農日記」「満州日記」をもとに『太平洋戦争下・農学校生の日記』を出版しました。「生活日誌」は鷲森洋氏が一年生の九月から翌年七月までの学校生活を綴っています。教練の様子など当時の農学校生の日常を知ることができます。鷲森氏は二年生になり八月から三カ月間、北海道援農に行きそこで「援農作業日記」を綴りました。氏が学校に宛てた手紙の中に「ただ今は産業戦線における食糧増産戦の突撃戦が北海道の地でおこなわれています…」との文言等もあり、当時の生徒の心情が読み取れます。

湯原実氏の「満満日記」は昭和十八年、興亜学生勤労報国隊満州建設勤労奉仕隊農学校隊員として選抜された十名が富田半次先生の引率により関東地区十八校の生徒たちと共に現在の中国黒竜江省二竜山地区の農場に援農に行った記録です。この日記は実に克明に作業内容が綴られています。湯原氏は当時の資料を完全に保存しており、現在もご壮健で農業に従事されています。写真は満州援農に行った生徒たちが実習中に撮影したものです。

広大な満州での援農実習

『太平洋戦争下・農学校生の日記』A5判　総二七九ページ　グラビア三十ページ
ご入用の方はお手数ですがご連絡下さい。

阿見町阿見四六三〇の八四　松岡　斉
電話０２９（８８７）４７１１
価格は二、八〇〇円ですが二千円で配布します。

かけがえのない縁

相原利恵
（平成23年度卒）

江戸崎総合高校を卒業してから二年が経とうとしています。新しい環境の中で活き活きと過ごしながらも、高校生活に思いを馳せると感慨無量になります。人との縁の大切さを一番強く感じた高校三年間でした。気の置けない友人達、熱心にご指導下さった先生方、常に励まし応援して下さった同窓会の皆様、そして私の生活の中核にあった弓道を通じて自分を見つめ知り、自分自身と出会うことができたのです。このかけがえのない多くの人との縁が今、私の心を強くしてくれていると実感しています。大学では人一倍真面目に勉学に取り組み、保健体育教師になる目標に向かって励んでいます。また、部活動の一環でドイツ遠征に参加して視野が広がり、充実した大学生活を送っています。今までの縁に感謝し、これからの出会いも大切にしながら成長したいと思います。

部活動でドイツ遠征

校内各部だより

信頼

生徒指導部長　横田　正幸

私はこれまで、県内でも比較的歴史の浅い学校に勤めてきました。そこでは同窓会と言っても自分と同年代か下という事が多く、若いＯＢ達が四苦八苦しながら学校のサポートをしてくれていました。しかし本校は、総合高校としての歴史は浅いものの、江戸崎高校、江戸崎西高校時代を含めると、そのＯＢたるや相当な数に上り、地域のため、社会のためにご活躍されている方々も大勢いらっしゃいます。そうしたＯＢの方々に恥じない学校づくりのため、生徒指導担当としてもっとも意識していることは、我々教員と生徒、保護者、そして地域の方々との信頼関係を構築していくことです。信頼とは、お互いのことを受け入れ、受け止めることでしょう。時には対立することもあるでしょうが、すべては子どもたちのために必要なことです。そして、行く行くは彼らが江総のＯＢとして地域や社会に貢献できるような人材になってほしいと思います。そのためにも、同窓会の皆様との信頼関係を深めながら、子どもたちのより良い成長のために貢献できればと考えています。これからもご指導ご鞭撻をお願いいたします。

進路状況報告

進路指導部長　仁林　拓也

本年度の進路状況をお知らせします。十二月十日現在で進学希望者は、七十三名。茨城大学の一名をはじめ、大学十五名、短大一名、専門学校三十三名の合計四十九名が合格しています。就職希望者は、九十五名中、七十名が内定を得ることが出来ました。

アベノミクスの影響で景気の上昇に伴い、求人数も増加傾向にあるものの、まだまだリーマンショック以前の求人数には至っていません。

女子に対する求人はさらに厳しい状況となっています。

また、若年者の就職支援のため、ハローワークと連携して卒業生に対する相談や紹介をしています。

就職でお困りの方は進路指導部までお問い合わせ下さい。

最後に、同窓会の皆様の益々のご活躍を祈念すると共に今後もご指導ご鞭撻を宜しくお願い致します。

平成二十五年度　進路状況

主な進学先	合格者
茨城大学	1
中央大学	1
千葉工業大学	1
東京女子体育大学	1
流通経済大学	5
中央学院大学	2
日本工業大学	2
つくば国際大学	1

主な就職先	合格者
自衛隊	2
ネスレ日本㈱	1
㈱紀文食品	1
㈱カスミ	1
㈱ＤＮＰデータテクノ	2
京阪セロファン㈱	2
つくばセントラル病院	1
㈱壱ち乃	1

（平成二十五年十二月十日現在）

文化祭について

特別活動部長　安藤　成男

十月二十五日（金）と台風の影響で二十六日（土）の予定が二十八日（月）に第４回江陵祭が行われました。二十五日はステージで各クラスや部の企画のＰＲ発表をおこないました。

一企画の発表時間が三分と短い時間でしたが、芝居やコントなどのパフォーマンスが見られました。そして、有志部、吹奏楽の発表、クラス対抗のクイズ大会で全校生徒が盛り上がりました。

２日目は模擬店やクラスの企画展示がありました。月曜日で保護者のみの来場と制限したのにもかかわらず、模擬店は盛況で昼までには売り切れるお店がほとんどでした。

屋外ステージではクイズの決勝大会、のど自慢、ダンスやバンド演奏で盛り上がりました。実行委員会の製作係で製作された入場門は夏休みから計画して作られたものでしたが、一般の方に見せることができず、製作スタッフ一同がとても残念がっていました。

同窓会の皆様には、これからもご支援・ご協力を宜しくお願い致します。

自然科学系列紹介

系列主任　飯塚　尚人

「理系」と聞くと、どのような印象を持つでしょうか。難しいという印象を持つ人が多いかもしれません。自然科学系列では、主に数学や理科に特化した、いわゆる理系と呼ばれる内容を中心に学習していきます。しかし決して難しいだけの学問ではありません。数学科では数学Ｂや数学Ⅲの授業を通して論理的思考力を培います。理科では物理・化学・地学・生物という多岐にわたる科目での様々な実験や理論を通して世の中の自然現象を科学的に考察していきます。これらを通して科学的なものの見方を学ぶことは、難しいだけでなく、大きな達成感や充実感を伴うものです。

自然科学系列の卒業生が四年制大学の理系学部や競争率の高い企業に進路決定することが多いことからも、系列内の学習を通して十分な「生きる力」を得ることが出来たことが伺えます。

各年次だより

二十五年度を振り返って

一年次主任　森田　繁

一年次では、生徒が社会に向かって立派に巣立つため、高校生の今、何が必要か考えさせる材料を学校の教育活動全般を通して提供してきました。特に、教科「道徳」や「産業社会と人間」では、各方面の第一線で活躍されている方々、近隣中学校の校長先生、本校の卒業生などを講師に招いて講演をいただき、自分の在り方や生き方を見つめるよい機会となりました。

また、今年度はＰＴＡ総会終了後の一年次懇談会で保護者の方々を対象とした講演会を実施しました。進学を考える上で欠かせない「マネープランガイダンス」や本校生徒の約半数が希望進路としている「就職講話」を開催しました。保護者の皆様にも現状を知っていただく場になったと思っています。

様々な人々の関与が生徒の成長を大きく促し、高い教育力につながるものと考えていますので、今後とも皆様のご協力をお願い致します。

エントロピーの法則

二年次主任　山本　正光

物理の世界において、「エントロピーの法則」というものが存在します。熱湯に氷を入れるとぬるま湯になります。当たり前の話しですが、熱湯と氷がそれぞれそのままの状態ではいられません。

たとえば、ある日自分の部屋を掃除したとします。でも、放っておけば数日で散らかります。あるいは、新品の携帯電話を屋外に放置しておいたとします。数日置いていたとしても何ら変化はないかもしれませんが、数十年、数百年も経てば、錆び付き、朽ち果てて、最終的に消滅してしまうでしょう。このように、区別→混在、秩序→無秩序、有→無という、物質を支配する変化の方向性を「エントロピーの法則」と呼んでいます。この一方向の流れは、一見、どうしようも出来ない変化に思われますが、実はこの流れに逆らっているものがあります。それは、人間の営みです。たとえば、散らかった部屋は人間の手でいくらでもきれいにできます。また、物が消えて無くなったとしても、また同じものを作り出すことができます。このように、人間は何かを創造し、無秩序な状態を秩序あるものにすることができます。人間がこの世に生まれ、存在している意味は、物質を支配する負の法則、「エントロピーの法則」の流れにのまれずに、よい人間関係を創造し、そして自分の個性や能力をフルに生かしながら、何か社会に貢献できるものを創造し、より秩序だった、平和な世界を築いていける人材に育って欲しいと強く願っています。

三年間を振り返るとき

三年次主任　川松　隆宏

三年前の最初の年次集会を思い出します。その時の言葉がこれです。

意識を変えれば
習慣が変わる
習慣が変われば
性格が変わる
性格が変われば
人格が変わる
人格が変われば
運命が変わる

そして、「顧笑ろう」「がんばろう」常に笑っていられるようにしよう。

生徒と共に考えたいのは、何のためにルールがあり、何のためにルールを守るのか。結局のところ、一人ひとりが様々な経験を通して肌で感じることこそが、一番の学ぶ機会だったのかもしれません。

私自身、保護者の方と連携して事に当たるとき、たくさんの想いに触れさせていただき、自らの子供をいかに大切に想い、将来を考え、サポートしているかという事を改めて感じることが出来ました。その上で「これでいいのか」と自問自答する毎日でした。分かっていても出来ないことがあること。どうしてもこの壁は越えないといけないこと。うまくいかない理由は、全て他者にあるのではないこと。信念を持って取り組むことは必要だが、その信念は、常に化学変化を起こすこと。また、起こさないといけないことであり、それは成長の証ではな

いかと思うこと。同時にプレてはいけないことがあること。

運命を変えるために、今何が出来るかをシンプルに考え、まずは意識を変える所から第一歩を踏み出す。

そして、それは自分で決める。最初の一歩が最大の一歩であること。

卒業を控えた三年次生との節目の年、どうか笑顔で、そして、健康で、楽しい人生を送ってもらいたいと思います。

卒業おめでとう。

本部役員

会長	山岡恒夫	
副会長	飯塚育男	
〃	岡見武夫	
〃	大島居良行	
〃	松田由雄	
〃	及川和浩	
〃	根崎稔美	
監事	松本博志	（校長）
〃	根本弘一	
顧問	中澤繁	
事務局	鳥羽勝	
〃	黒岩喜一	
〃	糸賀和夫	
〃	糸賀勝男	
〃	茂木徹	
〃	菱木明美	
〃	細谷昌寿	
〃	鈴木晶	
〃	中山和昭	
〃	朝日向克夫	
〃	桑島徹	
〃	猪井義雄	
〃	會田文夫	
〃	唐澤幸	

支部長

江戸崎	本橋洋一	
君賀	朝日向克夫	
高田	岡沢成美	
沼里	山崎賢一	
南房	孝一	
羽成	邦夫	
木原	安中	
平野	勝雄	
君原	波辺	通
朝日	森山	政美
舟島	平岡	博
阿見	野口	俊一
牛久	飯田	千春
栄崎	有坂	勝芳
太田	篠田	晶夫
根本	沼崎	孝
大須賀	山口	勝夫
伊崎	根本	恒雄
十余島	松本	幸衛
本新	江寺	治夫
阿波	秋本	精一
古渡	内埜	新也
浮島	宮本	和昭
生板	荒井	孝司
長竿	松本	勇
源清田	藤ヶ崎	一郎
金江津	小川	尚敏
長戸	湯原	祖
八原	岩田	邦夫
大宮	猪俣	忠男
竜ヶ崎	高木	昂
土浦		
水戸		
東京		

平成二十六年度　事業計画（案）

校内幹事会	随時
本部役員会（本年度事業について）	五月下旬
本部役員会	七月下旬
本部役員会	八月中旬
研修会（先進地）	八月下旬
本部役員会	十月下旬
本部役員会（会報「古城」について）	十二月上旬
会報誌「古城」編集委員会	十二月中旬
会報誌「古城」編集委員会	一月中旬
会報誌「古城」編集委員会	二月上旬
本部役員会（代議員総会について）	二月上旬
同窓会入会式	二月下旬
卒業記念品贈呈	二月下旬
会報誌「古城」第三十七号発行	二月下旬
校内幹事会・本部役員会	三月上旬
本部役員会・会計監査	三月中旬
第一〇九回江総同窓会代議員総会	三月下旬

編集後記

今年度も皆様から多くのご寄稿を頂き、古城第三十六号をお届けすることが出来ました。ご協力いただきましたことと深く感謝致します。

今年、創立十周年を迎える江戸崎総合高等学校の様子を、微力ながら皆様にお届けすることが出来たのではないかと思います。これからも会報古城の紙面を通して、会員の皆様との繋がりを深めつつ、本会発展のお役に立てればと考えております。

最後になりますが、今後とも皆様のご協力ご支援をお願い申し上げます。（ま）

広報委員

大島居良行
山岡　恒夫
岡見　武夫
飯塚　育男
鳥羽　勝